

【由来する時代】

古

墳

奈

良

平

安

鎌

倉

1 今津朝山

今津村と朝山村の合成。『今津』は「古津(現在の富津)」に対する。『津』は港の意味で、古代この地に船が着いた。『朝山』は、もとは麻山。鷲神社縁起によると、天富命が天日鷲命の子孫を引き連れ、この地に下りて麻を植えて回った。その出来

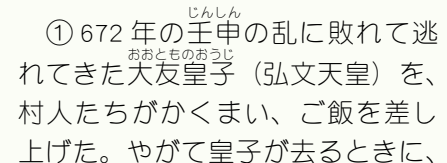
が良かったため、この地域を『総の国麻山』と呼び、当地を麻山村と名付けた。今津村と麻山村はいつしか合併し、元禄時代にはすでに今津朝山村に。現在、当地には天日鷲命をまつる鷲神社が鎮座する。(郡誌)



鷲神社

2 菊間

菊麻国に由来。大和朝廷から、上海上国と菊麻国の豪族が国造に任命され、服属関係にあった。菊麻国造かその一族のお墓が、姫宮古墳・菊間天神山古墳(いずれも市指定文化財)と推定される。(地方史) 菊麻の表記がいつから菊間になったかは不詳。



菊間天神山古墳

飯給 ① 672 年の乱に敗れて逃れてきた大友皇子(弘文天皇)を、村人たちがかくまい、ご飯を差し上げた。やがて皇子が去るときに、お礼に地名を残したという。② 『イタ』には崖の意味があり、『傷む』の語幹であることから、養老川の浸食により崖が崩壊した地形を表す。(地方史)



飯給

4 国分寺(現在地名:国分寺台)

大化の改新が断行されると、国・郡・里の制がしかれ、国造に代わって国司が置かれた。ここ市原には、上総国の中心地として現在の県庁に当たる国府が置かれ、聖武天皇の詔によって国分寺が建立されたことになむ。



上総国分寺跡(西門跡平面復元)

5 郡本

国司の下には郡司がおかれて郡が治められ、その役所は郡衙といった。現在の『郡本』は、郡衙の所在地であったことに由来する。(地名辞典)

6 小折

語源は『郡』で、律令時代の海上郡衙に推定地とされる。(地方史)

特集・地名の由来(1面から続く)

市原史、地名にあり

普段何気なく使っている地名には、実は隠された歴史のロマンが満載です。市原には、日本武尊や平将門、源頼朝の伝説に由来する地名もあります。私たちの住むまちは、多くの歴史と文化が育まれています。

※下図中の丸番号は、文中の番号に対応しています。



平将門伝説にまつわる地名(7 奈良、8 古都辺、9 犬成、10 喜多、11 勝間)

奈良 将門は、下総国猿島(茨城県)を平安京になぞらえ、南にあるこの地を奈良と名付けた。当地には奈良の大仏が鎮座するが、最初のもは将門が建立したと伝えられる。(郡誌)



奈良の大仏

古都辺 古き都の辺り(=上記奈良のほとり)にあるところから。(郡誌)

犬成 将門は自ら新皇(新しい天皇)と称し、この地に幸した(=お出掛けになった)。ゆえに、この地は『院成』となり、これが転じた。(市津の民話)

喜多 上総国府村高帳では、もとは犬成村に含まれ、その北の位置にあったため『北村』と書かれた。縁起のいい『喜多村』と改称したのは廃藩置県の頃。(市津の民話)

勝間 もとは『勝馬』。将門に敵対する人が当地におり、この地を開拓。将門に勝つように、との願いから、『勝将』から『勝馬』に。(市津の民話)

12 能満

仏教用語、当地積蔵院の『五梅の四向文書』の『悉能満足波羅密』から名付けたもの。なお当地は中世以降『府中』と称された。これは中世の国府の所在地にいた遺称であり、能満だけに冠せられたことは、国府が能満にあったとする説の有力な裏付けとなる。(地方史)



府中日吉神社(能満)

13 惣社

国司が国内の神々を参詣する労を避けるため、上総国内の神々を合祀した。一国内の神を合祀した社を総社(惣社)という。(地名辞典)

14 平蔵

天慶年間(940年頃)、この地に紀伊の土橋平蔵がいたことによる。なお明応4年(1495年)に建立された当地の西願寺阿弥陀堂は、平蔵城主・平将経が城の鬼門守護のため建立したもので、国指定の重要文化財。(郡誌)



西願寺阿弥陀堂

15 金剛地

① 庚保3年(966年)、慈恵大師が紀伊国熊野に詣でたとき、その神が10万の金剛童子(仏)に姿を変えて現れ、この地を指示した。② この地にある熊野神社を土気城の鬼門除けにしようと、7歳の子を金剛童子に仕立て、紀州の熊野神社の神体を迎えた。ゆえに『金剛子』と呼ばれ、『金剛寺』『金剛地』へと変化した。(郡誌、市津の民話)



熊野神社

16 不入

荘園の不入の権(田を調査する役人の立ち入りを拒む権利)を与えられた土地による。(地名辞典)

源頼朝伝説にまつわる地名(17 廿五里、18 君塚、19 矢田、20 風戸)

廿五里 『廿』は二十の意味。つまり廿五里は二十五里を意味する。一説では、昔この地にあった東泉寺の繡仏(刺繍の仏像)が霊異(不思議)な現象)を起こし、これを崇敬した源頼朝が、毎月焼香の遣いをこの地によこした。その距離二十五里。しかし実際には二十五里より遠い。読み方は、かつて当地が津比比地や露乾地と呼ばれていた名残り。(郡誌)



難読地名の一つ

君塚 治承4年(1180年)、相模の石橋山の戦いに敗れ、安房に逃れた頼朝が、鎌倉に向かう途中この地で千葉常胤の出迎えを受け、大変喜んだので『喜見塚』と呼ばれた。『塚』は、この地に古墳が存在するため。(郡誌、地方史)

矢田 戦いに敗れた頼朝がこの地で再挙をはかったとき、勝利を占って矢を射たところ、田の中に立ったため。(郡誌)

風戸 里伝では、この地の寺に頼朝が参詣したとき、強く吹いていた風が、戸を立てたかのように急に静かになったことから。(地方史)

神社の社名に由来する地名

31 島野

島穴神社。『しまな』→『しまの』に転化。かつてこの地域の森に深い穴があり、そこから常にさわやかな風が吹き出していた。日本武尊がこの地に立ち寄った際、風を鎮める神をお奉りするべき所と定め、風の神・志那津比古命を奉斎した。(郡誌、地方史)



32 姉崎

姉崎神社。伝説では、姉の志那斗弁命(姉崎神社)が、弟の志那津比古命(上記島穴神社)より早くこの地に来て弟を待ったから、姉崎(のち姉崎)とついた。(郡誌)



33 八幡

飯香岡八幡宮。白鳳3年(675年)に同宮が勧請されたのち、八幡郷と称された。(郡誌) 境内の『夫婦銀杏』は樹齢1300年超の県指定文化財。



35 武士

建市神社。元慶8年(884年)に従五位下を授けられた。



36 神代

神代神社。同神社は、貞観10年(868年)に、高瀧神社、前廣神社(西広)とともに、従五位下を授けられた。



34 高滝

高瀧神社。同神社の最初の鎮座地は粟又の滝の上であり、この滝の別名を『高滝』といった。(郡誌)

21 椎津、22 池和田、23 海士有木

※市内には戦国時代の城跡が多数あり、現代に地名を残しています。

椎津 語源は不詳だが南北朝時代から見える地名。椎津城は西上総の要地に位置したため、この城ほど戦場と化した城主が激しく交替した城はない。三浦定勝は椎津城を開いたが、上総守護代武田信長は定勝を追い、同城を真里谷城の支城にした。のちに里見義堯が椎津城を奪う。一度は北条氏の手に渡るも、再び里見氏が取り返す。天正18年、徳川氏の所領となり廃城。



椎津のカラダミ

椎津地区では、現在でも盆行事として『椎津のカラダミ』が行われている。椎津城落城時の城主・椎津小太郎を憐れむものとも、城主を逃がすために偽の葬式で敵を取ったものとも伝えられる。(郡誌)

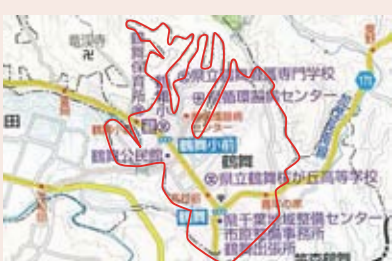
池和田 和田太郎正治が勢力をふるい、付近に大きな池があったことから、ここを池の和田と呼んだ。この地に築かれた池和田城は、のちに里見家と北条氏の合戦の舞台となり、上記椎津城が北条氏の手に渡った同年(永禄7年:1564年)、北条氏

25 五井金杉

天明4年(1784年)に、荘左衛門らが、五所村西方の浜に来て製塩を始めた。『金杉』は、荘左衛門が江戸金杉村(現東京都台東区金杉)出身であったことになむ。(上総国町誌)

27 鶴舞

鶴が翼を広げたような地形になむ。(地方史) 鶴舞藩は明治になって成立。



現在の地図(赤線が鶴舞)

28 三和(地区)

昭和30~31年にかけて、市西・養老・海上の三村が合併したとき、『三村和合』の願いから名付けられた。

29 南岩崎

昭和42年、市原市と合併(それまでは南総町岩崎)したとき、五井地区の岩崎と区別するため南の字を冠した。

30 ちはら台

市原市と千葉市から1字ずつとって『千原』とし、親しみやすいように平仮名で表記した。



まち開き20周年記念行事(平成20年)

は池和田城も攻め落とした。(郡誌)

海士有木 里見氏の攻めにより、北条氏の武将・二階堂実綱は鎌木城で討死。現在、その城跡と実綱の供養塔とも考えられる『石造十三重塔』(市指定文化財)が残っている。(郡誌)



石造十三重塔

24 五所

御所と書いた。戦国時代、この地に八幡公方足利義明が館を構えたことから。義明は里見氏などを旗本に入れ、のちに小弓城主となった。(地方史)



伝足利義明の墓標

26 門前

郡本村から分村するとき、当地の玉泉山宝積寺の門前にあったことから。(地方史)



宝積寺の門